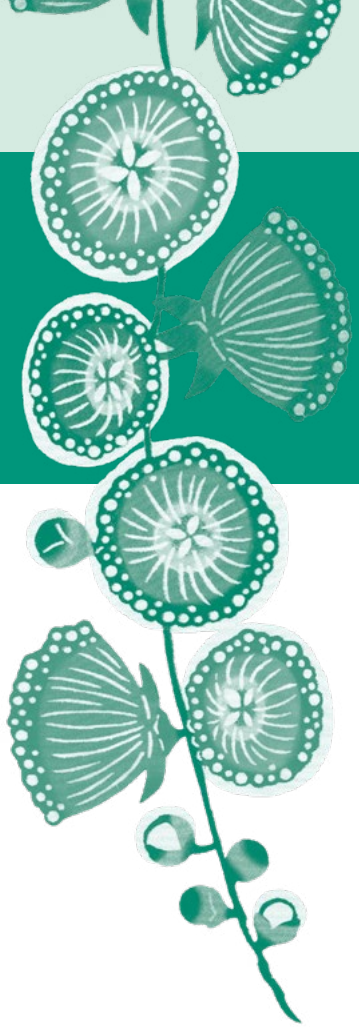
9章
広がる活躍の分野

概説
安谷屋眞理子
新垣安子
いらみなぜんこ
儀部葉子
潮平俊
多喜ひろみ
定子与那覇・トゥーシー
正子・サマーズ
松田敬子
南沙織
コラム　SDGs
コラム　世代を超えて



9章

広がる活躍の分野

終戦直後の沖縄は、働き盛りの男性の多くが地上戦で犠牲になったことから、男女の比率がおおむね１対２となるいびつな人口構造となった。夫や父親を戦争で失った女性たちの暮らしは、家族を世話し家計を支えるという生活の立て直しから始まり、沖縄の再建へと向かっていく。人生の進路が家庭の事情に左右され選択肢が乏しい中でも愚直に道を切り拓き、女性というだけで直面する生きづらさの棘（とげ）をひとつずつ取り除き、制度化につなげていった。いま、その基盤を起点に女性たちの活躍の分野は広がり続けている。

西銘むつみ（日本放送協会記者兼解説委員）

戦前・戦中・戦後の理不尽を乗り越えた先に

1950年代、沖縄各地で婦人会を中心に生活改善運動が進められるなか、人々の空腹を満たそうと沖縄戦で荒廃した土地の開墾から生活改善グループの活動を始めた松田敬子。農村の女性が夫とともに農作業をし、家に帰れば家事、育児を担い睡眠不足となる過重労働と、売り物の野菜は作るがみずからは食せず貧血に陥る栄養不足を問題視した。敬子は2000年代に朝市の開催も始めているが、今や、朝市は地域によっては「マルシェ」という形をとり、伝統的野菜や特産品をアピールする場にもなり、域外からも人を呼び込んで地元の活性化に寄与している。野菜ソムリエも登場した。健康、食という敬子が大切にしてきた「生きるための基本」は、より広く深く根づいている。

敬子と同様1920年代後半に生まれた正子・サマーズは、戦前、4歳で遊郭に売られ、戦中は日本軍「慰安婦」とともに行動。戦後は闇市で働くという歴史や社会の理不尽に翻弄される。しかし、渡米後、異郷の地で絵の才能を開花させ成功を手にする。その生きざまは、絶望の淵にあっても自身の力で道を切り拓くことができるという強いメッセージを放ち、後世に勇気と希望を与えている。

1930年代初めに生まれた儀部葉子は56（昭和31）年、沖縄教職員会で婦人運動に関わり、男女の給与格差の是正に取り組む。当時、教員の給与は薄給で、軍作業や別の職業への転職が後を絶たなかった。とりわけ、戦前女性教師の初任給は35円と、男性教師より5円安く、教員の仕事のかたわら、さまざまな物を売って生活費を補う女性も多かった。子どもの人権や尊厳というテーマにも重きを置く葉子にとって、女性教師の待遇改善を図ることは、次代を担う生徒の健やかな成長に無関係ではないと見据えていたのだろう。「運動は10年を要する」。目の前の成果ではなく地道に着実な成果を求める姿勢は、地続きで横たわる教育現場の課題解決に今こそ必要な視座である。

潮平俊も30年代の半ばに生まれた。故郷の石垣島から移り住んだ東京で、公共図書館の設置運動を行う。開館を実現させた成功体験を島に持ち帰り還元した。図書館という箱物の設置以上に心を砕いてきたのは、子どもたちに良質な本を読んでもらうことだ。移動図書館の活動に注目し、廃車になったバスを活用した「バス文庫」も作った。活字離れ本離れが叫ばれる今、民間の書店と公共図書館の融合や、一箱本棚オーナー制度、在沖米軍基地の状況を知ってもらいながら本も読めるという基地のそばのバス文庫など、俊のような開拓精神を持つ人たちによって、本との絆の再構築が行われている。

俊と同様、沖縄の外から培ったノウハウを「逆輸入」した女性に、40年代初めに生まれた定子与那覇・トゥーシーがいる。結婚を機に渡米するも夫が急逝。独りで

子育てをしながら人権や保健衛生について究め、その知見を沖縄に共有した。アメリカでは空手を通して沖縄文化を発信し県人会長を務め、「世界のウチナーンチュ」を地で行く沖縄とアメリカの架け橋を担った。定子をはじめ42万人に上ると推計される世界のウチナーンチュの存在は、故郷への誇りを再認識させるとともに、近年「内向き」と言われる世代の目を外に開かせてくれる。

戦前、戦中、戦後と激動の歴史を歩んできた沖縄の、個々の歴史にも光を当ててきた新垣安子。その取り組みを受け継ぐことはもとより、記録し編む側の処遇の改善も待ったなしの課題である。

戦後生まれが選び、拓いた道

先人が築いた基盤によって、戦後、生き方を選択できるようになる女性が増えていく。

終戦の年に生を受けたいらみなぜんこ、その4年後に生まれた安谷屋眞理子、50年代に生まれた多喜ひろみの3人は、ラジオ局のアナウンサーの草分けであり、ひいては「男社会」と言われたメディア業界の開拓者でもある。ぜんこは激務と育児のはざまで退社を決断するが、いまもフリーでアナウンサーを続けている上、活動の領域をさらに広げている。眞理子とひろみは定年まで勤め上げ、メディア業界にいる後輩たちに道を拓いた。2025年には日本でラジオ放送が始まって100年がたち、その後に開始されたテレビ放送も70年余の歴史を刻んだ。この間、沖縄テレビのアナウンサー、寺田麗子は、ニュース番組の中で河川・環境問題に切り込むシリーズを立ち上げ継続的に放送したほか、琉球放送の比嘉京子は、社内で、昼や夜の定時ニュースを女性アナウンサーが読む道をつくった。いま、テレビ局では、育児休業後の職場復帰が、職員のみならず契約職員にも広がりを見せ始めている。

世代を超え国境を越え

多喜ひろみと同じ年の1954年に生まれた南沙織は、沖縄出身の歌手や俳優の全国区での活躍を喜ぶ。「平成の歌姫」とも呼ばれ惜しまれながら引退した安室奈美恵は、ファッションやメイクでも共感を呼び社会現象を引き起こした。俳優の仲間由紀恵、満島ひかり、比嘉愛未、二階堂ふみ、黒島結菜の活躍もめざましい。

スポーツの分野では、宮里藍が2010(平成22)年、日本選手初の世界ランキング1位に輝き、女子ゴルフ人気の立て役者となった。五輪では、女子重量挙げの仲嘉真理が2000年のシドニー大会に出場し、その後も指導者として活躍。バレーボールの座安琴希は16年のリオデジャネイロ大会で5位入賞、ハンドボールの池原綾香は21年の東京大会モンテネグロ戦でチーム最多得点を挙げた。車いすマラソンのトップランナー、喜納翼は、パラリンピックの東京大会に続き24年のパリ大会にも出場。

映画監督の宮平貴子が製作した『カラカラ』はモントリオール世界映画祭で数々の賞を受賞。映像作家の山城知佳子、映像ディレクターの平良いずみは沖縄の課題にも目を向けた取り組みが注目されている。

海外を拠点に活躍する女性も増えている。医師ではジャパンハートの嘉数真理子、小児医療の島袋梢、天文学者の嘉数悠子、エミー賞を受賞したヘアメークアーティストの宮城万里子、ハリウッドの話題作にも関わるデザイナーの押元須上子など、活動の分野もエリアも広がり続けている。

私たちが享受する今の状況を後退させることなく、一歩でも前に進めていくことが未来に向けての責任である。

池原綾香の東京五輪での活躍に期待を寄せる、母校・那覇西高の女子ハンドボール部のメンバー =2021年6月23日、那覇市の同校(琉球新報社提供)

安谷屋眞理子

Adaniya Mariko ● *1949-*

銀幕へ誘うラジオ番組半世紀
心静まる語り口が魅力

安谷屋眞理子の父・山口宗正(那覇出身)は日本水産が台湾に設立した子会社「東部水産」(1939-44、後年合併)の社員。母・柴子は首里士族の末裔で、父は台湾総督府警察で勤務したのち、塩や米・たばこの専売を手掛けていた。両親は台湾で結婚し、終戦後に日本水産の創業地である北九州市戸畑区に引き揚げた。眞理子は1949(昭和24)年、2人姉妹の次女として同地で誕生。父の転勤に伴って東京都武蔵野市へ移り、豊かな自然環境の中で育った。

小学3年生の時、父が退職し一家で沖縄へ帰郷。標準語教育の一環として沖縄教職員会の指導の下に49年から始まった「童話・お話・弁論大会」が盛んに行われる中、東京のイントネーションを身に付けていた眞理子はいつも「標準語がきれい」とほめられた。大会の発表者にも抜擢され、国語の教科書に掲載されていた『風の又三郎』(宮沢賢治)を暗唱するなど活躍の機会を増やしていく。

進学した琉球政府立松島中学校は、少数精鋭を謳う3クラスのみの新設校だった。のちに「沖縄県子どもの本研究会」を立ち上げた徳田淡(きよ)が国語の教師を務めており、朗読の魅力に惹きつけられた。中学校では自分の作文を暗唱する意見発表会に出場。「将来はアナウンサーになろう」と明確に意識するようになる。

首里高校では放送部と弁論部の両方に入部したが、ゆったりとした眞理子の口調は独特の話法で政治的なテーマを喝破する弁論大会には合わなかった。琉球大学に進学後も放送研究会に在籍し、先輩のつてでラジオ沖縄の番組アシスタントを1年ほど務めた。卒業後は琉球放送の研修生を経て73年4月、極東放送(84年からエフエム沖縄に改組・社名変更)のラジオ番組を制作していた広告代理店に入社。半年後に同局のアナウンサーとして迎えられ、牧歌的な社風の中で眞理子のおおらかな持ち味が開花していく。

映画を紹介する番組「スクリーンへの招待」(日曜夜8時~)も同年4月にスタートしていたが、眞理子が引き継いでアレンジを加えた。夜は映画館へ足を運び、キネマ旬報などの映画雑誌を読み込んで沖縄で上映されない作品の知識も蓄え、当選者に郵送するチケットの宛名は直筆で書いた。24歳の時に同僚の安谷屋稔と結婚。一女に恵まれた後も家族の応援と協力によって天職に打ち込み、朝7時から始まる「おはよう!!琉球列島」や夕方6時からの「歌謡ステーション~心ほどいて~」などの帯番組も担当した。60歳で定年を迎えた後は番組契約の形でパーソナリティーを続けたが、顎関節症で話しづらさを覚えたため、72歳で引退を決意。「スクリーンへの招待」も2021(令和3)年9月、49年間に及ぶ歴史にピリオドを打った。

現在は現役時代に専念できなかった家事も楽しみながら、家族との時間を慈しんでいる。「49年間、完全燃焼できたのも家族のおかげだと感謝している」。

(石田奈月)

極東放送に入社したばかりの頃(エフエム沖縄提供)=那覇市の沖縄三越

新垣安子

Arakaki Yasuko ● *1946-*

フィリピン残留孤児問題を調査
移民史に新視点
家族の歴史もたどる

2000年、国吉和夫撮影

1946(昭和21)年、平安座島(現うるま市)出身の父新垣壬英とフィリピン人の母フランシスカ・セナ=新垣夫巳枝=の7女4男の5女として平安座島で生まれる。沖縄国際大を卒業した79年から浦添市史、佐敷町史の編さん事務局の嘱託として25年間勤務した。並行して那覇女性史、金武町史、新沖縄県史などで移民、戦争、戦後の分野を執筆した。個人的には移民史から抜け落ちた「フィリピン・パナイ島の残留孤児」問題に取り組み、戦後に夫の国で暮らしたフィリピン人妻の調査も重ねた。

背景には家族の歴史がある。父は17年、農業移民としてミンダナオ島のダバオに渡った後、パナイ島イロイロ市に移り漁業を行う。30年、漁業中継地のネグロス島で母と出会い結婚。41年に日米開戦。フィリピンは日本軍の占領下に置かれた。戦争末期の45年3月、米軍上陸を知った在留邦人約250人が、山に撤退する守備軍を追って逃避行中、老幼婦女子の「集団自決」が起きた。安子家族は現場を離れ、全員無事だった。避難先で生き延びた約120人は敗戦後の9月に下山した。収容所を転々とした後、日本人の強制送還が始まった。在留邦人と行動を共にしたフィリピン人妻の中には、現地召集された夫の生死も確認できないまま日本への引き揚げ船に乗った者もいた。

安子の両親は73年、戦後初めてパナイ島を訪れた。この旅で2人は日本の肉親を探したいと切望する残留孤児の存在を知らされた。帰国後、父は老いの身で県内各地に住む関係者を訪ね歩いた。ダバオは移民数が多く現地での慰霊祭や調査も早くから行われていたが、パナイ島では沖縄県人の慰霊祭は行われていなかった。

当時、安子は父の思いに共感しつつも「国がやるべき仕事だ」と斜めに見ていた。しかし父の死後「誰かが記録しなければ」と思い直して81年、母と共にパナイ島に飛んだ。2度目の訪問で、いとこの案内を頼りに置き去りにされた孤児の聞き取りを始め、県内でも関係者を探した。男性視点の移民史では語られない多数の女性や子どもの戦後の生活があり、残留孤児が注目される一方で見落とされる妻や母の物語があった。安子は「残留妻子」と位置付けた。

パナイ島の「集団自決」で生き残り、現地の人に育てられた人の実母が沖縄で見つかったのをきっかけに「自分の親族も探して」との訴えが続々と安子に届いた。「昔パナイ島で仕事をしていた」と見知らぬ男性からカンパが届いたこともある。

安子の家族にはいつも音楽があった。小学生時代は夕食後に星明かりの下、家族で「音楽会」を開き二部合唱もした。定番は母の故郷の民謡、「ネグロスの子守歌」だった。高校生の頃の安子は復帰デモでは「沖縄を返せ」を歌い、62年のNHK交響楽団の演奏会では米軍基地内の「ズケラン体育館」へ走った。

音楽ファンは長じて、国内外の素晴らしい演奏家を沖縄にと動き、音楽鑑賞団体カノン友の会の主宰にもなった。「沖縄県民の体験と重なる」と心を寄せる韓国・済州島の4・3事件で虐殺された住民の慰霊祭にたびたび参加。沖縄と済州島を互いに訪問し、歴史を学び合う民間交流も重ねている。(玉城愛・黒田華)

安子の父母と5人の姉兄たち(43年に四女が生まれている)=1941年4月、フィリピンのパナイ島イロイロ市

いらみなぜんこ

Iramina Zenko ● *1945-*

取材、編集、アナウンサー
ラジオのアナウンサー半世紀
「童謡の心」広げる活動にも力

「こんにちは、いらみなぜんこです」。県内ラジオ各局などから流れる柔らかな声。フリーアナウンサーとして活躍するぜんこは「ラジオで話したい」というひたむきな思いを胸に、アナウンサーの道を歩んできた。

沖縄戦終焉の直後に生を受けた。「北へ避難する」。ぜんこを身ごもった母・島袋清子は、共に避難していた自身の父(ぜんこの祖父)の直感に従い北へ向かった。その後、米軍トラックに乗せられた母たちは宜野座収容所に収容され、1945(昭和20)年10月6日に宜野座収容所のヤギ小屋でぜんこは生まれた。球部隊に召集されていた父・朝勇とは後に再会できた。祖父母は、戦火をくぐりぬけて生まれたぜんこを愛情いっぱいに可愛がった。

戦後は軍用機の爆音が響く米軍基地のそばで「また戦争が始まるのではないか」という恐怖心に苛まれる一方、Aサインバーから流れる、今まで耳にしたことがない軽快なエルビス・プレスリーの音楽を聴いて育った。時代劇や母もの映画に夢中になり、見た映画を脚色して芝居をするようになった。人前で演じたり話したりすることが楽しいと思うきっかけとなり、小学5年の日記には「将来の夢はアナウンサー」と書き記した。

コザ高校卒業後は東洋大学へ進学し、放送研究会に所属した。東京アナウンスアカデミーにも入学し、アナウンサーとしての基礎を学んだ。標準語へのコンプレックスからホームシックも経験したが、祖母がラジオから流れるぜんこの声を聞いて喜んでいる姿を想像することで気持ちを奮い立たせた。

68年にラジオ沖縄に入社。ラジオカーの前身となるサテライトカーに乗って、県内各地のニュースや話題を中継した。30歳の時に、次男妊娠時に「このまま仕事を続けると赤ちゃんは保証しない」という医師の言葉で退社を決めた。出産後はフリーアナウンサーとして、ラジオ沖縄の主婦向けのワイド番組「ファミリーサロン780」を担当し、録音機を担いで夜遅くまで国際通りでネタを探し、編集作業もこなした。「ラジオでしゃべれる」という嬉しさの一方、ピンチヒッターとしての起用が多く、もんもんとした日々が約15年続いた。

「自分の道は自分で切り開こう」という思いで、90(平成2)年に広告代理店「プロジェクトゼンコ」を創業。営業の仕方も手探り状態だったが、取材で出会った人とのつながりも活動を後押しした。92年の童謡のふるさとを訪ねる取材をきっかけに、童謡を歌い伝える活動を始めた。県内外や海外でも童謡コンサートを開催した。思うように仕事ができない時期の焦燥感を包み込んでくれたのが、「七つの子」で知られる野口雨情の世界観だった。2012年には「NPO法人童謡の心を広め歌い継ぐ会」を設立。学校教科書から童謡が減って歌われなくなっている現状から、幼児教育など学校現場での講演会などを通じて、「童謡のメッセンジャー」として童謡普及にも力を入れている。

これからも「100歳の女子アナウンサーがいたっていいじゃない」という思いを胸に、ますます輝くアナウンサーの道を突き進んでいく。(宮田麻衣子)

サテライトカーで仕事中のいらみなぜんこ =1970 年代

儀部葉子

Gibe Yoko ● *1931-2021*

（1998年撮影）

平和を願い
沖青協、教組事務局、女団協会長
女性の地位向上に情熱注ぐ

儀部葉子は1931（昭和6）年、山城将可と美津江の長女として那覇市で出生してほどなく、郵便局員だった父親の転勤を機に両親の故郷、石垣市へ移住した。父親っ子で、父親から褒められるのが嬉しかった。幼稚園の学芸会では主役を務め、高校では弁論部に所属した。11歳で父を亡くして以降、葉子が家族の父親的な役割を担った。生活は厳しいが仲の良い安らぎのある家庭だった。

八重山高等学校卒業後すぐ、小浜小中学校で小学2年生の担任になった。絵本の読み聞かせや創作話が人気で、放課後も多くの子らが葉子の下宿先に押し掛け「お話」をせがんだ。歌や遊戯を教えるのも上手く、好きな日本舞踊も踊って見せた。葉子自身も教職は天職だと思ったが、母親から家計が厳しいと相談され、やむなく1年足らずで琉球気象台石垣島測候所へ転職した。しかし教え子らとの交流は葉子の晩年まで続いた。

葉子は家族に「自分を育てるのは自分」だとよく話していたとおり、このときも新しい職場で前向きに過ごす中、新たに青年運動に関心を寄せるようになった。家族で那覇に移住した後の53年、日本青年団協議会主催の全国青年弁論大会に「平和への祈り」と題した弁論で沖縄代表として出場し優勝、文部科学大臣賞を受賞した。この弁論大会を機に48年に結成された沖縄県青年団協議会（沖青協）の活動に参加し、中でも全県的な取り組みに展開していく過程にあった復帰運動に深くかかわった。

沖青協での指導力が評価され、56年、葉子は屋良朝苗沖縄教職員会会長から声を掛けられ、同会事務局の婦人部担当として就職した。以後20年間、様々な婦人問題の運動に携わった。葉子が直接かかわった運動は86年、葉子が宮里悦らと共同執筆し出版した『沖縄・女たちの戦後焼土からの出発』（ひるぎ社）に詳しいが、戦前の女教師の男性教師との給与格差是正、サンマ裁判支援などがある。

67年、葉子は第1次沖縄婦人団体連絡協議会の事務局長にも就任した。9年間で物価値上げ反対消費者大会の開催はじめ様々な物価運動、通貨切り替え時の佐藤栄作首相への要請行動などの多事にかかわった。この間、法律を学ぶ必要を痛切に感じ、中央大学法学部通信課程で学び、68年、初の行政主席公選の運動にも深くかかわった。多忙で家も留守にしがちだった葉子は72年の日記で2歳の娘に宛て、沖縄の子らの幸せな未来のために「ママは、たくさんの仲間と一生懸命がんばっているの」と書いている。

また、戦後日本の婦人運動の先駆者、市川房枝の思想に共鳴した葉子は、66年、外間米子らと日本婦人有権者同盟沖縄支部を結成し、同じ志の仲間と学習会や要請を行った。98年、第3次女性団体連絡協議会では会長を務め、劣化ウラン弾、ダイオキシンの環境汚染の問題や日米地位協定の見直しなどを訴えた。

20年間勤めた職場最後の日。葉子は終業後で誰もいない中、心を込めて全員の机を拭き「長い間お世話になりました」と声に出し、一礼して職場を後にした。鬼籍に入ったのは2021（令和3）年。晩年、夫と娘が、職場を辞めるときにそれぞれ葉子を真似たと告白し、3人で笑い合った。

（伊志嶺和歌子）

教職員会で仕事中の儀部葉子
=1961 年、那覇市

（2023年5月撮影）

潮平俊

Shiohira Toshi ● *1935-*

郷土の歴史文化に寄与する石垣市立図書館の設立に尽力

1935（昭和10）年5月23日父浦崎賢保、母光の5人姉妹の3女として石垣町（現石垣市）石垣で出生。教育熱心な家庭で育った。父は小学校校長であったが、戦後教職に復帰する同僚たちもいる中で、軍国主義を推進し多くの教え子を戦場に送ってしまったと、自ら教育界を去った。優しく、人間を愛した父の教育観をあやまらせた力とは何か。俊の問いの原点である。

終戦直後の八重山は、米軍政府の代行機関として住民による自治政府が誕生し、教育制度も八重山教育基本法や学校教育法案がつくられるなど過渡期にあった。俊は石垣小学校卒業後試験選抜を経てジュニアハイスクール、八重山高校附属中学校、八重山高校を経て実践女子短期大学を卒業。八重山高等学校の国語の助教として2年間勤めた後、55年同郷の夫との結婚のため上京し2人の子どもに恵まれた。71年に移り住んだ東京都多摩ニュータウンで、「子どもの本を読む会」のちに「なかよし文庫」を立ち上げ、子どもたちへの読み聞かせ活動を始めた。充実した蔵書をもつ公共の図書館の必要性を痛感し文庫仲間と図書館設置運動を始め、多摩市立図書館設置要請書を市議会へ提出。多摩市立図書館は73年に開館した。

20年余過ごした東京から77年家族で石垣に移り、翌年、地域の公民館横にある御嶽の敷地内に当時の石垣小学校校長はじめPTA5人で廃車になったバスを利用した「バス文庫」、後に浄財で建設した木造の「みやとり文庫」を開設した。市内に点在していた8つの文庫で連絡協議会を結成し市立図書館の設置を市に要請した。また同会員を中心にした有志で八重山の昔ばなしを学び、昔ばなしを語る実践活動も始めることができた。

89（平成元）年石垣市教育委員会で社会教育指導員として勤め始め、石垣市立図書館の基本計画作成のため、図書館準備室から開館まで携わり、90年に開館した図書館職員としても勤務することができたことを幸せに感じている。

石垣市では、国際婦人年の目標である『男女共同参画社会を目指す行動計画』を策定することが必至となり、市総務部総務課へ異動となり『石垣市男女共同参画計画いしがきプラン』策定に関わることになった。95年には中国北京市懐柔で開催された北京NGOフォーラムに俊の他2名で参加し、「八重山の戦争マラリア被害者の実態を訴える」をテーマに発表した。世界の女性たちの活動と参加者の交流し合う大きなうねりを体感し、帰国後、石垣市女性団体ネットワーク会議を立ち上げ「まるざーフェスティバル」を開催した。このフェスティバルは現在も継続され2026（令和8）年には第22回目を迎える。参加団体に「女性問題は人権の問題である」と訴えて男性も加入する人権擁護団体が参加したことは意義深く、大きな励みになったと振り返っている。知る権利、読む自由が保障され、八重山の歴史文化に寄与する市立図書館の設立に基本構想の段階からかかわることができたことを幸いだと思っている。他方、女性自身の権利意識を高め、意思決定の場に女性を送り込む努力はまだ必要だと語った。

（平美千子）

幼少期からの読書の大切さについて話をする潮平俊＝2018年5月、石垣市

多喜ひろみ

Taki Hiromi ● *1954-*

ラジオにハッピーをのせて 県民と「お昼の会話」40年

（2011年撮影）

1976（昭和51）年に極東放送（エフエム沖縄の前身）に入社。お昼の人気番組「ハッピーアイランド」のパーソナリティーを務めながら、2026（令和8）年にアナウンサー歴50周年を迎えた。

1954年に那覇市で生まれ、小学校高学年は東京で過ごし「復帰前の沖縄とは授業内容も環境も違い良い経験になった」と振り返る。当時の経験がアナウンサーを目指すきっかけにもなった。スポーツが苦手で運動会はアナウンスを担当し、「それからずっと放送部。昼休みはお知らせを読みクラシック音楽をかけた。毎回内容が似ていて、6年生の時に自分で考えたプログラムを放送すると先生が褒めてくれた。そのうれしさが現在につながっている」。

沖縄に戻った中学時代も放送部で番組作りを楽しみ、授業中の本読みは東京で身に付けたアクセントを生かし褒められた。「声で伝えることが好き」という思いはその後も変わらず、東京の短大卒業後はアナウンサーの道に進もうと決意し、東京でアナウンス学校に通った。

オイルショックによる経済不況の中、沖縄で就職活動し、極東放送への補欠入社が決定。合格者が辞め声が掛かった。「補欠だった私が50年いるなんて」と本音をこぼすが、入社当初から多くの困難を乗り越えてきた。先輩のアシスタントを務めながら業務を覚え、3カ月後に独り立ち。「構成を考え曲を選んで番組原稿を書き、ミキシングも1人でやるのが社の方針。アナウンサー兼プロデューサーの『アナデューサー』として業務をこなすのが当たり前だった」。

エフエム沖縄に社名が変わりAMからFM放送に移行した84年には、夜の音楽番組を担当することに。企画から立ち上げ、85年4月に「ポップンロール・ステーション」をスタートさせた。家庭では育児に追われ仕事との両立はつらかったが、夫と母親の協力のおかげで続けられたという。そして半年後に「ハッピーアイランド」のパーソナリティーに。急な異動に戸惑いつつ、昼時間の勤務はラッキーだと受けとめた。その日から40年が過ぎる今も、リスナーのメッセージと共に音楽をかける番組スタイルは同じまま。局の看板番組になり、聴取率調査では20年以上1位を記録。届いた便りをまとめた本を8巻出版して話題になった。一方14年には病気で休養したが、持ち前のパワーを発揮し短期間で復帰。25年にはNHKテレビの全国放送に出演し、「長寿ラジオ番組のアナウンサー」と紹介された。

「番組を続けられるのはお便りあってこそ。リスナーさんは親戚のように思える。手紙や電話、ファックスからメールへと通信手段は進化したが、双方向でやり取りできるラジオの良さは変わらない」と語る。若い世代のラジオ離れに不安を感じ、「1人で解決するのが主流の現代だと思えても、人との関わりを大切にしたい」と心掛けている。番組に関わる全ての人と家族に感謝をしながら、マイクに向かう多喜ひろみ。優しく温かな美声と親しみやすい人柄で、県民をハッピーにする。

（饒波貴子）

「ハッピーアイランド」を始めた当時の多喜ひろみ＝1985年、浦添市

（2025年9月撮影）

定子与那覇・トゥーシー

Teiko Yonaha Toosie ● *1941-*

児童虐待防止、精神保健活動に尽力
NY県人会長10年、沖縄文化発信

1941（昭和16）年、名護で生まれ育つ。沖縄戦のさなかは4歳。母、祖母、兄弟と防空壕に避難し、出征した父の戦死を知ったのは終戦直後のことだ。戦後は実家の屋敷を修理し、庭を耕して食いつなぐ自給自足の生活だった。名護湾でのイルカ狩りもした。島で唯一の英語学校が設立され、家は生徒たちの寄宿先となった。裏庭では、彼らが「手（ティー、後の空手）」の練習に励む姿が日常の風景となった。のちの人生を支える空手との出合いである。

20歳の時、宜野湾の英字新聞社「Morning Star Newspaper Co.」（通称:モーニングスター）に就職した。職場で紹介されたのは、日本語を自在に操り空手に打ち込む一人の米国人男性。彼がのちの夫となる。

64年に結婚し渡米。67年、3人目の子の誕生からわずか2日後、夫はベトナム戦争の最前線へと出兵した。翌年帰還した夫と共に沖縄で5年間を過ごし、コロラド州を経て、77年に夫の定年退職を機にニュージャージー州へ居を移した。しかし、78年12月、夫が急逝する。残された3人の子育てと住宅ローンという現実に、「圧倒された」と振り返る。沖縄から駆けつけた母に帰郷を促されたが、子どもたちの希望を尊重し、米国で生きていく決意を固めた。夫の死から3カ月後、3人の子どもと共に空手道場の門を叩いた。

家族でアルバイトをして支え合う日々の中で、父を失った子どもたちの反応や、息子を亡くした義母の悲しみ、そして自分自身の心の機微を、どこか客観的に観察していた。ベトナム帰還後の夫に見られた心身の変化、そして家族が直面した起伏。これらの経験が、精神保健の学びへと突き動かしていく。

1984年から児童暴行防止（CAP）の訓練を受け、指導資格を取得。86年に州立大学を卒業し、88年からは郡立精神保健局に勤務した。多種多様な人種や文化が交錯する米国社会で、児童や青少年の心理相談や施策向上に身を投じ、最終的に大学院修士課程で精神保健の道を究めていった。

専門職の歩みと並行し、沖縄人としてのアイデンティティーも深化させていく。84年にニューヨーク沖縄県人会に入会。舞踊と空手を融合させた「武扇会」を創立した。90年の第1回世界のウチナーンチュ大会での演武披露や、94（平成6）年の国連国際移民協会のパレードと表彰は、異国で文化を継承する大きな力となった。その後、帰省の度に米国での経験を故郷へ還元する活動にも注力する。「うないフェスティバル」などで子どもや女性の人権に関する米国の先進事例を紹介。96年に県内に初めて設立されたおきなわCAPセンターの発足にも尽力した。

ニューヨーク沖縄県人会では2004年から10年間、会長を務めた。新聞コラム等を通じて発信も続けている。精神保健への貢献と沖縄文化の普及を貫く生涯。原点には、絶望の中でも周囲を奮い立たせて生きた母・与那覇ユキの背中と、師・中村文子氏の存在がある。（東江亜季子）

定子と夫、子ども3人の家族写真=1972年4月、名護市

正子・サマーズ

Masako Summers ● *1928-2016*

4歳で身売り「戦争花嫁」渡米後離婚 激動の人生 絵筆を光に

正子･サマーズは、戦後、覚えた英語で自伝を書き残した。小学校低学年までしか通わせてもらえず、日本語の読み書きはできない。書き出しはこうである。

When I was almost 4 years old, my father sold me to House of Prostituted.

「4歳の頃、父は私を遊廓に売り渡した」

正子は大阪で生まれ、3歳の頃に今帰仁村にある父親の実家に家族で戻った。常に空腹で、頭はしらみだらけだったと記憶している。連れていかれたのは、辻遊廓の並松楼であった。子どもの頃から宴会に出され、箏と踊りが得意であった。正子のアンマー（楼主）は有力者で、1943（昭和18）年のジュリ馬祭りでは人力車に乗る姫の役を与えられた。

一人前のジュリ（遊女）として客を取る水揚げを16歳で経験した。アンマーに「年頃になれば借金は返すものだ」と言われ、逃げられなかった。後に「生き地獄」とも振り返る現実であったが、客の海軍軍医と恋もした。灯火管制の中、2人で毛布をかぶり、トロイメライを聴いた。

軍の命令で、石部隊（第62師団）に付いて浦添の慰安所に移動した。正子は16歳と若く、「慰安婦」として兵士の相手をすることは免れたが、先輩のジュリたちは日本兵に代わる代わる性を弄ばれ、「実に哀れだった」と振り返る。45年、首里城地下の第62師団司令部壕に移動。正子は高級将校に食事を運ぶ係だった。5月末、南部に移動。ジュリ仲間と戦場を彷徨っているとき、米兵に保護された。

辻遊廓は前年の10･10空襲で崩壊していたが、借金の呪縛が正子にとっては何より恐ろしかった。米軍の調理場で働き、廃棄油を闇で売るなどして借金を完済した。

50年10月、米兵のノーマン･サマーズと結婚。52年、一緒に渡米した。正子は3度、流産し、最後には子宮摘出手術をしなければならなかった。ジョー、ジャネットという名の2人の子を養子にした。

70年、メキシコ人が絡む事件が頻発していたアリゾナ州ユマに移る。ノーマンは入国管理に関わる責任者に昇格していた。正子は町の絵画教室で水彩画を学び、絵の魅力に心を奪われた。73年4月、ノーマンが不法入国者を手引きした容疑で起訴された。給料は止められ、幼い2人を抱えて路頭に迷う生活となった。

「じっとしてはいられない。無意識のうちに絵を描き始めていた……」。正子はそう振り返る。

地元の美術展に応募すると一等を受賞した。その後、絵の注文が相次いだ。寝る間も惜しんで絵を描く生活が始まり、画廊を持つまでになった。

74年11月、ノーマンの潔白が証明され、未払い賃金も支払われた。ところが、正子の忙しさをよそに、ノーマンはメキシコ人女性と関係を持ち、3人の子どもがいた。正子は離婚を決意。26年半の結婚生活に終止符を打った。

一方、正子はアリゾナ･ウェスタン･カレッジから絵の講師を頼まれるなど、画家として輝きを放っていった。沖縄でのジュリ時代から苦難の連続だったが、米国では絵筆の力で希望をつかみ取ることに成功した。庭のバラを愛で、絵に囲まれた部屋で来客を温かくもてなす姿に、思いやり深い人柄が滲み出る。（原義和）

辻遊廓･並松楼で 前列右から2番目が正子＝1940年頃

（2012年頃撮影）

松田敬子

Matsuda Keiko ● *1927-*

生改グループ先頭に立ち「地産を食べる」運動展開

1927（昭和2）年11月13日、読谷村に生まれた。10代後半で沖縄戦を体験。戦後は同村座喜味出身の男性と結婚し、20代から婦人会や生活改善グループ活動に取り組んだ。長年一緒に活動を続けてきた仲間は高齢になっても強い絆でつながり常に新たな活動に取り組んだ。地域の食材や料理を伝えたいと80代を目前にした2006（平成18）年6月以降は毎月第2、第4土曜日に座喜味公民館で朝市を開催。自宅の畑で育てたハンダマ（スイゼンジナ）、ニンジン、ンースナバー（フダンソウ）などの野菜、手作りのパパイアの栄養漬け、ラッキョウの漬け物、炊いた玄米、サーターアンダーギー、おから炒め。また、朝市の目玉で、開催日の早朝6時前から作った熱々のゆし豆腐が並び、人気を集めていた。村で採れたそら豆を原材料にしたそら豆味噌が並ぶこともあった。

50年代初め、婦人会活動や生活改善グループの活動のきっかけは「食べること」だったと語る。高齢者や男たちもみんな疲れていて、元気がなかった。夫や姑や子どもたちに「せめてイモだけはお腹いっぱい食べさせたい」と考えた。といっても戦争で土地は荒れてしまっている。荒地を開墾して、大きくておいしいイモがとれるようにするため、一からのやり直しだった。

54年に35人で座喜味仲良し生活改善グループを結成する。琉球政府から生活改善普及員が派遣されて、指導や助言が受けられることになった。「集まりの時は『あんたのところはムシロある?』、とか声を掛け合い、湯飲みとか急須とかみんなで持ち寄ってどうにか格好をつけたものだった」と当時を振り返った。

意識が変われば、生活も変わるということを考え、そのことが実感できるようになるといよいよ活動に身が入った。「一人なら到底やれなかった。みんなと一緒だったから…」と語る。

家庭菜園の充実以外にも改善すべき生活の問題は山積みだった。交際費の問題も力を入れた。日々の暮らしは苦しいにもかかわらず、結婚式や生年祝い、入学・卒業のお祝いなどの交際費が家計のかなりの比重を占めていた。行事の簡素化を広めるためにも数字で示す必要があると考え、家計簿記帳に取り組んだ。83年には農村の生活改善活動に尽力したとして農林大臣賞を受賞した。

92（平成4）年、婦人会を卒業後は高齢者グループ「座喜味環境を守る婦人の会」を結成。「捨てたらゴミ、生かせば資源」を合言葉に住みよい地域づくりを目指した活動に励んだ。

朝市を始めたきっかけについては「当たり前のように作っていた土地の食べ物の作り方をかなり忘れている。『作る』から『買う』に変わった現実を思い知らされている」とし、「作り続けないと作れなくなる。地域の食べ物は、作り方を含めて伝え続けたい」と説明した。朝市はコロナ禍によって閉鎖を余儀なくされたが、20（令和2）年の2月まで約14年にわたって続けられ、人気を集めた。（山城紀子）

最優秀の農林水産大臣賞を受けて喜ぶ座喜味環境を守る婦人の会のメンバーら＝2004年（琉球新報社提供）

南沙織

Minami Saori ● *1954-*

「17歳」鮮烈デビュー 元祖アイドル
「沖縄があって自分がいる」

撮影：篠山紀信（1974年撮影）

アメリカ統治下、今のうるま市安慶名で生まれ宜野湾市で育った10代の少女、内間明美は、日本復帰を翌年に控えた1971（昭和46）年、南沙織として歌手デビューし、日本における「アイドル第1号」「元祖アイドル」と評されるようになる。

上京してわずか数カ月、数々のヒット曲を世に送り出した作曲家、筒美京平が手がけた『17歳』でデビューを果たし、レコードは約54万枚のヒットを放つ。この年、日本レコード大賞の新人賞を受賞し、NHK紅白歌合戦にも初出場する。また、この年と翌年の2年連続でブロマイドの売り上げ第1位を記録する。

デビューのきっかけとなったのは1枚の写真。沙織がアシスタントとして出演していた琉球放送のテレビ番組に男女デュオの歌手「ヒデとロザンナ」がゲスト出演し、沙織の母とロザンナが交流を深める中、一緒に撮った家族写真に映る沙織がレコード会社の目に止まった。

アイドルの生活は、家と車と楽屋の行き来でプライベートはなかった。ホームシックと沖縄シックで、事務所の屋上から空を見上げて泣いた。デビューから3カ月後、帰省した自宅で緊張の糸が切れたように眠り続け、翌日、かなり遅い時間に起きた。2階の窓から顔を出すと、一緒に東京からやって来ていた報道陣が取材を始めるべく待っていた。沙織に対し母親は、「何も残さなくていい。沖縄から来たあの子はいい子だった。それだけ残せればいい」と語りかけ、近所を回って帰省の挨拶をするよう促した。この帰省で沙織は、アメリカンスクールに通うきょうだい3人の学費の足しにしてほしいと、使う時間もなかった給料15万円分を母親に手渡している。

デビューから半年がたち、少し周りが見えるようになってきた頃を沙織は「目覚めの時」と呼ぶ。楽屋で居合わせた共演者たちから、沖縄出身の自分は日本人だとは思われていないと感じることがあった。一方で、沖縄の人はみんな自分のような感じだと、ひとくくりにされているような違和感を覚えていた。2026（令和8）年、71歳になった沙織は、「気がつけば自分が沖縄の代表のようになっていた。沖縄が大きくのしかかった。でも、それを裏切ることは私自身が苦しくなる。どれも自分のバネになった」と振り返る。

1978年、上智大学で学業に専念したいと引退。その後、写真家の篠山紀信と結婚する。篠山は晩年、華々しいアイドルでありながら沖縄の家計を支えていた、けなげな姿にもひかれたことを、次男で俳優の輝信に明かしている。その輝信は、沖縄の文化や米軍基地問題などをメディアや自身の脚本で発信している。沙織は「私より沖縄に詳しく誇りに思う」と話す。さらに、沖縄出身の歌手や俳優が活躍していることを「新たな扉がどんどん開いている」と目を輝かせる。

沙織は今も沖縄を訪れ、体調を崩している親せきを見舞う。デビューに向け沖縄を離れる際、餞別にと1枚の20ドル紙幣をくれた叔母の温かさが忘れられないからだ。「沖縄があって自分がいる。沖縄には感謝しかない。世界に誇れる青い海と空を大切にしてほしい」と、故郷へ思いを寄せる。（西銘むつみ）

（左から）夫・篠山紀信、南沙織（篠山明美）、篠山輝信（写真提供：篠山明美）

コラム SDGs

世界を拓いた「まなざし」

五大州に生きた「棄民」から「移民」へ

世界の架け橋たらんとしたその精神は、近代以降の荒波を越えた移民たちの足跡となり、今や世界に約42万人(2025年現在、沖縄県発表)の「世界のウチナーネットワーク」へと結実している。

沖縄移民の父、当山久三(1868-1910年)が遺した「いざ行かん、我らの家は五大州」という言葉は、今もこの島で深く刻まれている。第二次世界大戦前、日本全体では移民は100人に1人という割合であったが、沖縄県では約10人に1人が海を渡った。この数字の背景には、何があったのだろうか。

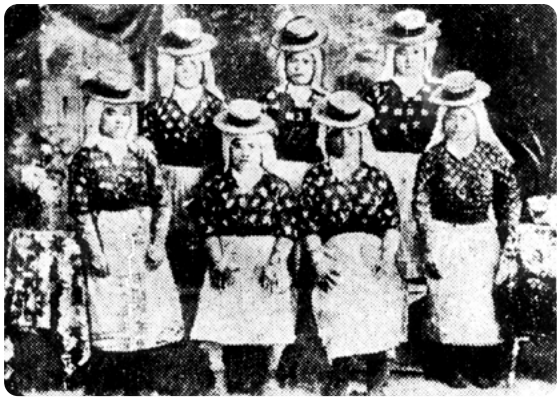
明治時代、日本の移民政策は、1865(慶応元)年の米国における奴隷制廃止に伴う労働力不足があり、85（明治18)年以降、移民は多分に国策の道具であり、農村の窮乏を救い、近代化のための外貨を稼ぎ、不平等条約の改正を有利に進めるための手段に過ぎなかった。そこには、自国民を「口減らし」として送り出す「棄民政策」としての側面があったことは否めない。あわせて、国境を超えた移民政策の裏には、沖縄の女性たちの翻弄された苦難の歴史があった。98年の徴兵令施行や家父長制を柱とする民法施行は、沖縄に「日本的なジェンダーの役割」を強制した。政府は沖縄独自の風俗を「野蛮」と断じ、1899年には「入墨禁止令(刑罰の適用)」を断行した。沖縄女性の「ハジチ(手の甲の入墨)」は、一転して「処罰(外出禁止や海外から沖縄への送還)」と「差別」の対象となったのである。

従者から「永住の礎」へ:「写真花嫁」たちのレジリエンス

1905年、ハワイでは先陣を切った男性らによる移民に続けと、女性らの呼び寄せが始まった。当時は、女性たちの呼び寄せの理由が必要であり、「夫の下に」、「弟の下に」、または「父の呼び寄せにより」と記されている。しかし、ハワイに到着すると、男性と変わらない過酷な労働環境下に置かれていった。ハワイを皮切りに、中南米、そしてニューカレドニア、フィリピンへと一気に沖縄の女たちの海外への渡航が始まった。

06年、ハワイ行きの船に乗ったハジチのある女性2人は、他府県の日本人から「日本の恥だ」と罵られ、ホノルル到着までの10日間、船室に閉じ込められた。当時の新聞は、ハジチがあり、膝丈の短い着物を着て裸足で歩く沖縄女性を「野蛮そのもの」と書き立てた。

08年以降、「日米紳士協定」が結ばれると、男性単身の移民から夫婦のみ同伴が許される形へと移民の契約が変わっていった。多くの女が親の決めた相手と「写真花嫁」として海を渡った。なかには泣いても行かされたと振り返る女たちもおり、「波止場結婚」とハワイでも呼ばれ、24（大正13)年には、「排日移民法」により、写真花嫁が禁止となる。さまざまな理由で海外に進出していくなかでも、女たちは現地において、労働者を監視する「ルナ(監督官)」に縛られた男性の従者において、耕作・炊事・洗濯という三重の重労働をこなしながら、沖縄の精神「ゆいまーる」を異郷の地に根付かせた。単なる出稼ぎ集団は「永住型の日系コミュニティー」へと昇華された。現在の世界のウチナーネットワークのゆるぎない土台は、幾多の差別を耐え忍び、沖縄の心を次世代へと繋ぎ続けた女性たちの献身的な歩みの結晶である。



「花嫁」移民として渡航した女性たち（那覇市歴史博物館提供）

――沖縄女性のレジリエンスと持続可能な未来

玉城直美（(株)うなぁ沖縄・代表、社会起業家）

「哀史」を塗り替える経済的主体

移民が世界へ広がる一方で、20年代の「ソテツ地獄」と呼ばれた深刻な不況期、本土の紡績工場へと向かった少女たちがいる。家族を救うため、10代の若さで故郷を離れた。長い間、この歴史は男性研究者や記者たちによるマクロな視点から、過酷な労働にあえぐ「哀史」として語られ、深夜勤務や搾取の「犠牲者」そして、悲劇に耐える「弱者」として位置づけられてきた。

しかし、紡績経験の女を研究した大城道子らが、当事者一人ひとりの人生（ライフヒストリー）に深く向き合うなか、物語の景色は一変した。女たちの口から語られたのは、同情をはねのける程のたくましさであった。明治以降の義務教育を通じて「知る力」を蓄えており、自ら契約書の内容を確認して署名、賃金を稼ぎ出す「経済的主体」としての自覚を持っていた。少女たちは、自らの意思で家族や故郷を救う道を選び取った国内労働者における沖縄初の女性賃金労働者であったのだ。グローバルな構造に翻弄されながらも尊厳を失わず、自らの手で未来を拓こうとした意識があった。かつて「哀れ」と一括りにされた女たちのまなざしの先にあったのは、社会を静かに変えていく、主体的なエンパワーメントの始まりであった。

女性リーダーたちが牽引する国際協力

かつて差別されながらも海外に渡った沖縄の女たちの切り拓いた生き方や道は、戦後、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の前身である海外移住事業団へと引き継がれた。その国内拠点の一つ、JICA沖縄（浦添市）は今、世界と沖縄を繋ぐ要となっている。注目すべきは、近年のJICA沖縄における所長の変遷である。第14代所長（2019=令和元=年就任）の佐野景子を筆頭に、第15代（21年就任）の倉科和子、そして第16代（25年就任）の田中香織へと、女性所長が舵取りを担っている。

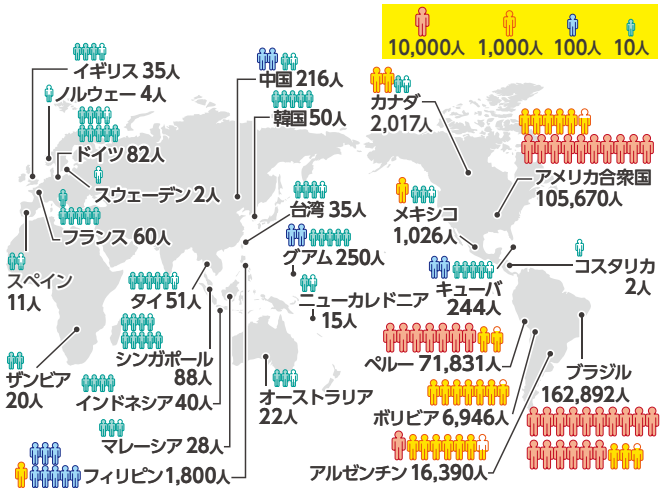
JICA沖縄の役割は、沖縄が培ってきた固有の知見を世界へと還元し、同時に「誰一人取り残さない社会」の実現に向けた視座を県内へと共有することにある。意思決定の場に女性が立つという事実は、ジェンダー平等が単なる理念ではなく、血の通った「実像」であることを社会に示している。こうしたリーダーたちの姿は、沖縄社会が抱える潜在的な課題に対し、新たな気づきを促す契機ともなっている。

未来への地図を紡ぐ女性たちのまなざし

かつて写真一枚を頼りに海を渡った「写真花嫁」も、紡績工場で遠く家族を支え続けた少女も、そして現代の最前線に立つ女性リーダーたちも、その根底に流れる精神は通底している。それは、不条理を静かに、しかし力強く変容させていくレジリエンスである。国境を越えて広がる「世界のウチナーンチュ」との絆は、沖縄らしいSDGsの核心をなすものと言えよう。

沖縄の女性たちが国境を越えて繋がり、多様なまなざしを共有する営みは、SDGsが目指す「持続可能で多様性を認める社会」の具現化である。彼女たちが幾世代にも渡って紡いできたネットワークこそが、現在の「世界のウチナーンチュ」を支える盤石な土台であり、沖縄が世界に誇るべき「未来への地図」なのである。

世界のウチナーンチュ分布図



2016 年度推計値※北米・南米ほかは県人会会員数（2016 年現在）（琉球新報社提供）

コラム　世代を超えて

ストリートからジェンダー

「若い世代のジェンダー認識の変化」「まちづくりとジェンダー」をこのコラムのキーワードとしていただいた。全く違うものに見えるこの2つを繋ぐため、琉球大学初の女性学長となった喜納育江の著書『故郷のトポロジー』の引用から始めたい。

「定住を経て『空間』が『場所』に成り得たとしても、その『場所』の共同体における人間の他者との関係性の中で自己を定義できなければ、そこに『居場所』は得られない」（p.22）。

どこが、いつ、誰の「居場所」になっているのか。空間に繰り広げられる「他者との関係性」は、人びとの生き様と直接に結びつく。順番にそれを観察する視点を一緒に追ってみよう。

ステップ１　「まち」における経験に気づく

時代の変化を感じるには、顔をあげて周りを見回すのがいい。できれば人の居るところ。異なる時間帯、異なる価格帯、異なる文化の根付いた複数の場所に出かけ、比較できるとなおいい。昼の商店街、放課後のショッピングセンター、夜の繁華街。人びとの表情や佇まい、会話のテンポ、流れる音楽。そうした「まち」の空気を感じながら歩いていると、「この場所は誰を想定しているのか」が浮かび上がってくる。

沖縄の「まち」は誰のどのような「居場所」だっただろうか。特に夜のまちは、危険や犯罪と隣り合わせであると同時に、「夜の街で働く女性」へのスティグマや差別とも結びつけられてきた。近年思い起こされるのは、上間陽子が『裸足で逃げる』で描いた女性たちや、打越正行の『ヤンキーと地元』に描かれるような男性たちと、夜のまちの関係だろうか。それは様々な人の日常に地続きであり、上間自身も「何か起こった際に抵抗できるよう、カギを手に持って夜道を歩く」ことを指示されていたという（「2021年ノンフィクション本大賞」授賞式）。

前述の喜納は、「移動とジェンダー」に関するシンポジウムでご一緒させてもらった。このイベントでは、「小さいころ祖母にずっと送り迎えされていたが、それは米軍の犯罪に巻き込まれないようにという心配からだった」という参加者の経験を聞いた。こうした土地の記憶は、女性たちがどの道を歩き、どこで立ち止まり、どこを避けるかという日常の選択に深く影響している。加えて、女性たちは通勤の直線的な移動とは異なり、子どもの送迎や日々の買い物など、多くの場所を細かく周る傾向にある。荷物が多かったり、ベビーカーを引いていたり、妊娠した体で動き回る場合もある。ここにも、まちでの体験にジェンダー差がうかがえる。

視点を変えると、「まち」は意見を表明する場所にもなる。フラワーデモのように、問いかけを投げかける場所としても使われてきた。広場に花を手に集まるその姿は、かつて傷つけられた場所を再び自分たちの居場所として取り戻そうとする行為でもある。その方法論は、女性たちの公共空間での経験から浮かび上がってきたものだろう。

沖縄県女性団体連絡協議会が開いた新春セミナー「私たちがもっと自由におでかけするために」に登壇する石垣綾音（右）と喜納育江＝2024年1月、那覇市の県男女共同参画センターでいる（県女団協提供）

を考える

石垣綾音(まちづくりファシリテーター)

ステップ2 「まち」での振る舞いに目を凝らす

ファッション。この特定の場所に居場所を見出す人びとは、どのように自分を表現しているだろうか。そこで優先されているのは自己表現か、機能性か、場の空気の一部をつくることか、それともその人が負う役割だろうか。

特にティーン世代のファッションはジェンダーに非常に敏感だ。制服でも、スラックスかスカートか、ヘアスタイルなのかといった記号だけでは、もはや彼ら・彼女らのジェンダーを判断することは難しい。「子ども」とは言い切れない彼らの「居場所」はまた複雑である。一般的には、ショッピングセンターのフードコートやゲームセンターに「とりあえずの居場所」を見出し、消費に絡め取られていく傾向にある。皮肉なことに、そこにある消費文化は、そんな彼ら・彼女らのジェンダー感覚を少しずつ変えている。「女性らしさ」「男性らしさ」だけでは収まりきらない多様なスタイルを選び取りながら、自分の身体とジェンダーを、親世代とは違う言葉とスタイルで編み直しつつある。

ステップ3 「まち」をつくる主体になる

では、どうすれば「まち」はより開かれるのか?それぞれの場所が再生産しているものは何だろうか。どうやって、誰が更新し、つくっていくのか。まちづくりやインフラ整備の現場には、ジェンダーの視点でそれを言語化し具現化できるプロフェッショナルが十分にいるとは言えない。建築分野には女性の専門家も比較的多いが、土木や交通計画となると、会議室で女性のエンジニアや担当者に出会う機会はまだ少ない。「この道を夜歩く女子学生や高齢者はどう感じるだろう」「ベビーカーを押す人はどこで一息つきたいだろう」と具体的に想像し、図面やダイヤに反映させる人材は圧倒的に不足している。

振り返ると、これまで沖縄には、リゾート開発がもたらす環境破壊に警鐘を鳴らし、ダム建設や林道建設に伴う森林破壊を調査してきた環境カウンセラーの渡久地澄子や、海岸線の調査に取り組み、保護や循環型農業の推進を行ってきた恩納村エコツーリズム研究会の仲西美佐子など、「まち」や「環境」に関わる実践を続けてきた女性たちがいる。また、大学や公的機関、民間企業を含め、まちづくりや都市計画に関わる女性は様々にいるし、これからも働きが認められる場が増えることを望む。

「まち」での経験にジェンダー差があることは否めない。しかし、それらを「女性だけの問題を解決する」ものとして語りすぎる危険性には注意が必要だ。その違いを注意深く観察すると、共通して必要なのは様々な使われ方や多様性を想定し、先回りしてデザインするような考え方や、「ケア」の視点ではないかと、最近は考えている。

ステップ4 自分自身を振り返る

「ところで、わたしはなぜここに?」と自分のことを振り返ってみる。変わりゆくのは周囲だけではなく、あなた自身も同様だ。どこを、いつ、どんなファッションで、どんな目的で訪ねるのか。そこにどんな人が居る前提で、どのように振る舞う前提でいるのか。あなたの「居場所」はどこで、どこにないのだろう。

参考文献
「社会を拓いた女たち」(高里鈴代、山城紀子、2014年、沖縄タイムス社)